

Citation: Esposito M, Worthington HV, Coulthard P. Interventions for replacing missing teeth: dental implants in zygomatic bone for the rehabilitation of the severely deficient edentulous maxilla. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2003, Issue 3. Art. No.: CD004151. DOI: 10.1002/14651858.CD004151.pub2.
CRG名: Oral Health

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 17 August 2005

Clib issue No.; N/U: 2008 issue 1; -

背景: 口腔インプラントは喪失歯の機能回復に用いられる。インプラント体を固定するために十分な骨量が存在しない場合には、口腔インプラントの埋入が難しい。この問題を解決するため、いくつかの骨造成術が開発されてきた。頬骨(ザイゴマ)インプラントは長いスクリュー型のインプラントで、高度に萎縮した上顎に対する部分的もしくは完全な骨造成術の代替療法として開発された。その内容は、1本から3本の頬骨インプラントを臼歯部歯槽頂と上顎洞を貫通して埋入し、頬骨骨体と一体化させるものである。補綴装置を安定させるために、数本の従来型の口腔インプラントを上顎の前方部に埋入することも必要とされる。頬骨インプラントの主な利点は、場合によっては骨移植が不必要となることと、固定性の義歯をより早期に装着できる可能性があることであろう。頬骨インプラントのもう一つの特異な用途としては、上顎骨切除後の癌患者における応用があげられる。

目的: 高度に吸収した上顎において、造成された骨に埋入された従来法のインプラント症例と比較して、骨造成術を併用または併用しない頬骨インプラント症例のアウトカムに差がないという仮説を検証すること。

検索戦略: 本レビューでは、Cochrane Oral Health Group's Trials Register、Cochrane Central Register of Controlled Trials (CENTRAL)、MEDLINE、EMBASEを検索した。いくつかの歯科雑誌のハンドサーチを行った。言語の制限は設定しなかった。未発表の試験が存在しないか確認するため、個人的な関係者と、すべての頬骨インプラント製造業者とコンタクトを取った。最新のインターネット検索は2005年5月に実施された。

選択基準: 少なくとも1年の追跡期間があり、従来法のインプラントでは機能回復ができないほど高度に吸収した上顎に対し、頬骨インプラントを骨移植のあるなしに関わらず行った患者と、骨移植を併用して従来法のインプラントを行った患者を比較するランダム化比較臨床試験(RCT)。考慮したアウトカム指標は、補綴装置とインプラントの失敗、有害な作用、患者の満足度、費用対効果であった。

データ収集と分析: 選択基準に合致した研究の選抜と、試験方法の質的評価とデータ抽出は2人のレビューアが別々に2回行った。連続変数アウトカムの結果は、平均差を用いたランダム効果モデルで、二分変数アウトカムの結果については、95%信頼区間と相対リスクを用いて表現した。異質性は臨床的、手法的要素の両面から観察された。

主な結果: RCTと比較臨床試験(CCTs)は1つも確認できなかった。

レビューアの結論: 萎縮した上顎の治療にあたって、頬骨インプラントが代替的な骨造成術よりもなんらかの利点を有するかどうかを評価するには、この領域におけるRCTが必要である。

(翻訳 園山 亘・監訳 窪木拓男; JCOHR)
翻訳公開日: 08年4月1日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点があれば、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。

